

魂の口ゴス的部

中川 純男

一 問題の所在

「魂の部分」と言うとき、われわれが念頭においているのはプラトンの、いわゆる魂の三分説である。すなわち、魂のうちに「口ゴス的」「氣概的、ないし激情的」、「欲望的」部分が区別されなければならないという論である。この論の原型を『国家』第四巻に求めるにしよう。国家は、構成員である三つの種族、すなわち金儲けにたずさわる種族、補助者*ēpikourikōv*あるいは軍人の種族、守護者の種族が、それぞれ自分のことを行うとき正義を実現する(434C)と確認された後、われわれひとりひとりにもこれと同じ特徴をそなえたものがあるのではないかとソクラテスは問う(435E)。国家の場合と同様、ひとりの人間の場合も、これら三つの部分がそれぞれ自分のことをするとき、全体としての魂ないし人間が正義や節制、勇気などの徳を実現する。『國家』のこの箇所を原点としつつ、魂の三分説が初期ストア派およびプラトン主義の伝統に、どのように受けつがれたのかを見るにしよう。

二 プロティノスの解釈

欲望について論じた後、氣概の部分についてプロティノスは次のようにいう。

『国家』第四巻において、魂に部分を区別するにあたり、プラトンがやや詳しく述べていることが一つある。ひとつは同じものが同じとき同じことについて同じものとの関係で反対のことたりされたりすることはないということ(436C)、もうひとつは、たとえば渴きという欲望は、特定の飲み物への特定の渴きと見ることができるものだけでなく、飲み物そのものへの渴きそのものと見ることもできるとグラウコンに認めさせていることである(439A)。渴くという語の目的語で表現される対象が異なっていても、「渴く」という働きはひとつの働きであると考えることができる。この二つの論点によりプラトンは、魂において異なるたときに異なるものを対象として働く同一の力という考え方、すなわち「能力」という考え方を確立していると言えよう。魂の部分を問題にすることは、魂の能力という考え方を、何らかの程度において、プラトンから受けついでいることを意味する。

ふたたび元に戻つて、氣概の部分について考えなければならぬ。われわれは、欲望の始源を、苦も快も、——感覺ではなくパトスのことであるが、特定のあり方の身体、生かされているとでも呼ぶべき身体にあるとしたのであるが、これと同じように、氣概の始源、いやそもそも氣概の全体も特定のあり方の身体、あるいは身体の何らかの部分に帰属させればよいのか。たとえば特定のあり方の心臓とか、死んでいない身体の胆汁とかに。またもし、魂の痕跡ではあるけれども別のものが与えるのであるか、氣概はそれだけでひとつ何かであるなら、植物的部分⁽¹⁾や感覚的部部分に由来するのではないかことになる。

プロティノス『エンネアデス』IV,4 [28], 28,1-

「ふたたび元に戻つて」と言われているのは、欲望の部分を考察するなかで、欲望の始源を求めて宇宙靈魂さらには宇宙の中心に位置する知性にまで話が進んでしまつたからである。そこで欲望の次に、欲望と（ほかならぬプラトンの文脈において）密接な関係にある氣概についての考察に戻ろうとプロティノスはいうのである。プロティノスが欲望や氣概、感覺といった魂のさまざまな部分ないし働きに何らかの序列を見ていることは確かである。その序列のなかで氣概はどこに位置づけられるべきか、これが問題である。序列のなかでの位置は、氣概において、上位の働きである感覺や知性に由来する働きが優勢であるか、下位の働きである植物的な働きが優勢であるかによつて決定さ

れる。植物的な働きとは、魂をもつものの身体をたんなる物体と区別している働きである。欲望は主としてこの植物的部分に由来する働きであるとされている。このように知性的な働きと植物的な働きを両端として、魂の働きを序列化するのはアリストテレス『デ・アニマ』における魂の区分の原理と多くの共通性をもつてゐる。たとえば「植物的部分」*φυτικόν*は、「生殖的部分」*γενητικόν*とも呼ばれ、植物だけがもつてゐるのではない。身体をそなえた生き物はすべて「植物的部分」をもつてゐる。プロティノスが『デ・アニマ』の表現を用いて、特定のあり方の物体と呼ぶのは、植物的な魂によつて全体を統一された有機体である。これに対し、感覚的部分は、動物の魂はそれをもつてゐるが、植物の魂はもつてゐない。知性的な魂は、人間の魂のみにそなわり、人間以外の動物はもつてゐない。このように魂の部分が階層的構造をなし、さらにそれが魂をもつ存在の階層的構造に対応しているという発想はアリストテレスのものである。このように考へる点において、アリストテレスやプロティノスは「魂の部分」を語りながらも、プラトンとは大きく異なつてゐる。プラトンが、欲望の部分と氣概の部分とを区別したのは、人間の魂に互いに他に解消されえない二つの働きが、同時に生ずると考えられたからであつて、魂の部分は魂をもつひとつのものの内部構造にとどまる。この内部構造が、魂をもつものの序列といった外部構造に対応することはない。プロティノスは氣概について考察を進める。

しかし氣概の部分 *θυμικόν*⁽²⁾について、いつたいそれは何なのか、どのような魂なのか、またそれに由来する痕跡が心臓、あるいは何か他の、両方からなるものとなっているものに、運動を与えるのか、それともそこではもはや痕跡ではなく、氣概の部分そのものが怒りを与えるのか。まず最初に怒りとは何か、考察しなければならない。まず、自分の身体が受けたことだけでなく、誰か身近な他人が受けることについて、そもそも誰かが不適当なことをする場合に、われわれが怒ることは明らかだろう。ここからすれば怒ることには感覚も何らかの自覺も必要である。だから、これらの事実を見てひとは、氣概が植物的部分から発するとは考えず、氣概は何か他のものから誕生するのだと考え、探求するであろう。しかし、身体の状態にともなつて怒りっぽくなっている場合とか、血液や胆汁の沸き立つている人々はたちまち怒るが、無胆汁質で冷たいと言われる人々は怒りに対し緩慢である場合、動物はいじめられるという思いからではなく、混合「体質」から怒る場合などには、ふたたび怒りを、より身体的なものへ、動物の全体を統一しているものへ関係づけることになろう。

プロティノス『エンネアゴス』IV,4 [28], 28,18.

プロティノスの関心は、特定の問題に向けられている。それは氣概と呼ばれる魂の働きないし能力が、身体に由来する働きなんか、それともそうではないのかという点である。身体に由来するとは身体を身体たらしめている魂の働き、すなわち魂の「植物的

部分」の働きを始源とするということである。氣概の働きである「怒り」には、他人の不正に対し怒る場合のように、認識を必要とするもの、しかも自他の区別といった高度な認識を必要とするものがある。しかし同時に体質によつて怒りっぽいとか、空腹のときにはすぐ怒るなどのように身体的条件と密接に関係し、身体的条件によつて成立していると見られる怒りもある。プロティノスは怒りについて、それが高度な認識から生ずるものなのか、身体のあり方から生ずるものなのか、二つの可能性のなかで、いずれであるかを決めようとしている。プロティノスが最後にたどりつくのは次のような説明である。

ところで魂の非ロゴス的部分が欲望の部分と氣概の部分に分けられ、欲望の部分は植物的部分であるが、氣概の部分は、血液や胆汁あるいはその両方における、欲望の部分に由来する痕跡であるなら、一方はより先、他方はより後であるのだから、両者の対立的区分は正しくないことになる。いやむしろ、両方ともより後のものであつて、同じものから付隨的に生じたもの *τῶν ἐπιγενομένων* の区分であるとしても差し支えない。欲求するものであるかぎりの欲求するものの区分 *ὅρεκτικόν* … *ἢ διάρρεος, ἢ ὄρεκτικά* であり、これらがそこから由来するウーシアの区分ではないのである。そのウーシアはそれ自体では欲求ではなく、それ自身に由来する働きを欲求に結びつけ欲求を完成しているのであろう。氣概として成立した、心臓においてある痕跡と言つて的外れではない。魂がそこにあるのではなく、特定の血液の始源が

そこにあるのだと書いておこう。

プロティノス『エンネアゲス』IV,4 [28], 28,64-

「いやむしろ」以下が、最終的な説明であると考えられる。欲望と氣概とは「同じものから付隨的に生じた」と考えて差し支えないと言わっているから、プロティノスは氣概の始源が身体にあること、すなわち植物的な魂にあり、この点で欲望と同じであると考えている。しかし、このことはプロティノスにとって、氣概をもつことあるいは怒ることが身体的な働きに限定されるということを意味しない。氣概の働きの始源は植物的な部分にあるとしても、それはたんに植物的な部分の働きであるといえるほど単純ではない。働きとウーシャーとの、このよくな、いささか隔たりのある関係が「付隨的に生じたもの ἐπιγενομένων」という語によつて表現されているのである。欲求するもの ὄρεκτικόν はプロティノスにおいてはきわめてまれな語である。しかもこの語は複数形で用いられている。おそらくここで念頭におかれているのは、欲望や氣概が魂のひとつ部分であるかという問題にかんするアリストテレスの解決であろう。

これらに加えて、欲求的部 分 ὄρεκτικόν もある。これは規定の上でも能力としても他のすべてと別であると思われよう。しかし、これを引き離すことは不合理である。ロゴス的部分においては意志であり、非ロゴス的部分においては欲望とか氣概であるからである。魂が三部分からなるなら、欲求はそれぞれの部分にあることになる。

氣概の働きの始源は、魂の植物的な部分にあるが、さらに上位の部分にまでその働きは及ぶとプロティノスは考えている。すなわち身体的状態が氣概の働きの出発点であり、それは心臓のまわりの血液の沸騰といった身体的状態として生ずるが、この身体的状態はさらに上位の魂の状態、たとえば自覚された怒りのような状態まで、いわば遠い結果として生み出しうると考えられているのであろう。結果の多義性ないし多層性を認めるプロティノスにとって、氣概はその働きがさまざま層に認められるのであって、働きを同定できたとしても、働きの元にあるウーシャーを同定したことにはならないのである。「欲求するものであるかぎりの欲求するものの区分であり、これらがそこから由来するウーシャーの区分ではない」と言われているのはそのためである。

三 初期ストア派

では初期ストア派は、魂の三区分についてどのように考えていたのであろうか。魂の三分説について、ゼノン、クレアンテス、クリュシッポスの三者の意見が異なつていたのではないかとガレノスは伝えている。

魂のパトス的部 分についてのクレアンテスの見解は、次のことばから明らかであると彼「ポセイドニオス」は言う。
〔理性 λογισμός〕氣概よ、きみの望んでいるのは何か、それ

をぼくに説明してくれ。

「氣概 Θυμός」ぼくが望んでいるのは、理性よ、望むことすべきをすることだ。

「理性」王のようなことを言う。だがもう少し何か言つてくれ。

「氣概」ぼくが欲求するとおりのことが、どのようにすれば実現するかということだ。

クレアンテスのつくったこのような会話は、魂のパトス的部分についての彼の見解を明白に示している、理性と氣概とに、互いに別のものであるかのように対話させているのだから、とポセイドニオスは主張している。しかしクリュシッポスは魂のパトス的部^{λογιστικόν}分と別であるとは考えず、非ロゴス的動物は明らかに欲望と氣概に支配されているにもかかわらず、非ロゴス的動物からパトスを取り除いている。これはポセイドニオスが非ロゴス的動物について十分に説明しているとおりである。じつさい動物のなかで、動かないもの、植物のように岩などに付着しているものは欲望のみで生活しているが、これら以外の非ロゴス的動物はすべて、両方の能力、すなわち欲望の能力と氣概の能力を用いており、人間だけが三つを用いている。

ガレノス『ヒッポクラテスとプラトンの学説』

V, 6 [V 476 K] (SVF I, 570)

ゼノンは、もしクリュシッポスと同じことを考えているのなら、同じ批判を受けることになるであろうし、クレアンテスやポセイドニオスと同じように、プラトンの原理に従っていたのなら、われわれの哲学に与することになるであろう。しかし、これはわたしがそうだと思っていることであるが、パトスは判断に付随する επιγνώσθαι と見なしていたのであれば、パトスについての最悪の見解であるクリュシッポスの見解と、最善の見解であり、ヒッポクラテスやプラトンが最初に導入した見解との中間であることになる。

ガレノス『ヒッポクラテスとプラトンの学説』

V, 6 [V 478 K]

欲望と氣概はともにパトス的部分と呼ばれている。「望むことすべきをすること」を望んでいるという氣概がプラトンの『国家』における氣概の役割を引き継ぐものであるかは疑問であるが、ガレノスの批判はクリュシッポスが欲望や氣概を魂のロゴス的部分と区別しなかったこと、すなわちロゴス的部^{λογιστικόν}分に含めたことに向けられている。これに対し、クレアンテスは正しく三者を区別しているからプラトンの考え方を継承していると評価し、ゼノンについては確定的なことは分からぬが両者の中間ではないかと推測している。

パトスは判断に「付隨する」と言われるときの「付隨する」の意味はガレノスの次のことをばから推測できる。

この話題の最後をガレノスは次のように結んでいる。

この点で「クリュシッポスは」ゼノンとも、彼自身とも、他の多くのストア派とも矛盾している。彼らは魂の判断のものではなく、判断にともなう *ἐπί ταῦτας* 非口ゴス的な収縮、弛緩、刺激、高揚、拡散が魂のパトスであると考えているからである。

ガレノス『ヒツボクラテスとプラトンの学説』
IV,3 [V 348 K] (SVF I, 209)

パトスは判断であるのか、判断にともなつて生ずるものなのかという問題に対するクリュシッポスの答えは、ガレノスによれば、彼自身（！）を含む他のストア派の多くの答えと矛盾している。多数のストア派は、パトスを収縮、弛緩、高揚、拡散といった身体的变化であると考え、この身体的变化は魂のロゴス的部分が下す判断にともなつて生ずると考えたのに対し、クリュシッポスはパトスも判断の一種であると考えたため、パトスを判断に解消することになり、パトスそのものの役割が失われた。このようにガレノスは批判しているのである。

はたしてガレノスの言うように、ゼノン、クレアンテス、クリュシッポスの意見が相違していたのか否かは、資料が不足しているため、正確には分からない。しかし、ゼノン、クリュシッポスを含むストア派はパトスについて共通する理解をもつていたという証言もある。

このひとびとは「メネデモス、アリストン、ゼノン、クリュシッポス」はみな共通して、徳はロゴスによつて生みださ

れた、魂の主導的部分の状態ないし力であるとする。いうよりむしろ徳は、矛盾なく確實で誤りえないロゴスそのものであるとしている。彼らは魂の非ロゴス的でパトスを許容する部分も、魂のロゴス的部分と本質的な差異により *διαφορὰ τινὶ καὶ φύσει ψυχῆς* 区別されているのではなく、彼らが思惟とか主導的部分とか呼ぶ、魂の同じ部分であり、パトスによって、また性格ないし気持ちの変化によって全面的に向き変わり、性質を取り替えて、悪徳となつたり徳となつたりするが、それ自身の中に非ロゴス的なものをもつてているのではない、と主張する。非ロゴス的と言われることになるのは、過剰な衝動が力をえて支配的となることにより、ロゴスの命令から外れて不適切なことに逸脱するときである。パトスとは、劣り「徳のない」誤った判断が強い力を獲得することから生じる劣悪で放縱なロゴスだからである、と言う。

ブルタルコス『倫理的徳について』3, 441c-d (SVF I, 202)

パトスもまた魂のロゴス的部分に生ずる。これはガレノスがクリュシッポスの説として批判していた考え方であるが、ブルタルコスはそれをゼノン、クリュシッポスを含む多くのストア派に共通の説としている。ディオゲネス・ラエルティオスも次のように言つている。

偽りから離反が生じて *ἐπιγνωσθαι* 思考にまで及び、この離

反から多くのパトスが芽生えてきて、不安定の原因となる。パトスとはゼノンによれば、非ロゴス的で魂の自然本性に反した動き、ないし過剰な衝動である。パトスの分類項目の内、最上位のものは、ヘカトンが『パトスについて』第二巻で、ゼノンが『パトスについて』で言うところでは四つの類、すなわち苦痛、恐怖、欲望、快である。彼らはパトスが判断であると考えた。これはクリュシッポスが『パトスについて』の中で言っていることである。じつさい、金銭を愛することは金銭は美しいという見解 *πτόηθεις* であり、酩酊や放縱なども同じことなのである。

ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』

VII,110 (SVF I,205, 211, III,412, 456)

これらの証言は、パトスは判断である、あるいはロゴスであるという説をゼノン、クリュシッポスを含む多くのストア派の共通見解であるとしており、ガレノスのように、クリュシッポスの説が他のストア派と異なつているとは考えていない。ではパトスとロゴス、あるいはパトスと判断とは、ガレノスがクリュシッポスについてそう考えたように、完全に同じであるとストア派は主張したのであろうか。先にわれわれはパトスにともなつて生ずるとされている「収縮、弛緩、刺激、高揚、拡散」を身体的変化であるといつた。これらの語のいくつかをガレノスが心臓や肺など内臓の変化に用いていることは確かであるが、ゼノンがどのような意味で用いているのかを教えてくれる証言はじつはない。しかしこれらが Diogenes Laertius VII,110 に用いられている。

た「離反」などともに何らかの身体的な変化を表す語であるとすれば（これはかなり確実性が高く、かつ説得的な想定であるが）、ストア派は判断とパトスとの間に身体的な変化を介在させていたのではないかと推測される。すなわち、ストア派は誤った判断が何らかの身体的な変化をもたらし、この身体的な変化がパトス（ストア派においては、誤った行動の原理）を生み出すと考えていたのではないか。もしこのようになれば、われわれが先に見た、怒りについてのプロティノスの問題設定、すなわち怒りは認識に由来するのか身体に由来するのかという問いは、その後に哲学史的な問題意識と批判的視点を有していることになる。

四 歴史的背景

最後にわれわれは、気概や欲望といった魂の働きの背後に身體的変化を想定する考え方の歴史的な背景について考えたい。

さきに指摘したように、初期ストア派はパトスの背後に身体的变化を見ていると考えられた。そしてプロティノスもそのような考え方があることを知っている。怒りと身体との密接な関係を支持する事例として、「血液や胆汁の沸き立つている人々はたちまち怒る」と言っていた。怒りなし気概が心臓のまわりの血液の沸騰である」という証言はアルニームの断片集に二つ収録されている。ひとつはガレノス『健康論』から、もうひとつはネメシオス『人間本性について』から採られている。これら二つの証言はしかし、厳密な意味での断片ではない。原資料にストア派の名は挙げられていないからである。ガレノスの証言は次のようなものである。

次のような章順になつてゐる。

氣概は「内なる熱の」たんなる膨張ではなく、心臓における熱の沸騰のようなものである。だから哲学者のなかでも名のあるひとびとは、そのウーシャーをそのようなものと言つてゐるのである。仕返しへの欲求は、氣概のウーシャーではなく付帶性のひとつである。

ガレノス『健康論』 II,9 [VI 138 K] (SVF II,878)

ガレノスによれば、心臓における熱の沸騰という説明は有名な学者たちの共通見解であつて、ストア派独自の見解とは考えられていない。もう一つはネメシオス『人間本性について』の証言である。

氣概は心臓の周りの血液が、胆汁の蒸発ないし攪拌から沸騰することである。

ネメシオス『人間本性について』 20 (SVF III, 416)

Arnim が用いたのはおそらく C. F. Matthaei 校訂のテキストであらう (1802)。そこではこの箇所を二一章とし、現在の校訂では二一章とされていふ一〇章の次においている。そしてその二〇章 (現在の校訂では二一章) に含まれてゐる「ガレノスが『論証の技術』第三卷で言つてゐるように」が二一章にも及ぶと考えてゐるのであらう。しかし本書は用語集のような構成になつており、各章は説明される用語に応じて区切られているから、引照指示が複数の章に及んでいるとは考へにくく。Morani の校訂では

第一六章 魂の非ロゴス的部分ないし種族について、これはパトス的部分とも欲求的部分とも言われる

第一七章 欲望の部分について

第一八章 快について

第一九章 苦について

第二〇章 氣概について

第二一章 恐怖について

第二二章

ロゴスにしたがわない非ロゴス的部分について

第二三章

栄養摂取部分について

Matthaei では二一章

Matthaei では一〇章

ロゴスにしたがわない非ロゴス的部分について

第一三章

栄養摂取部分について

項目の構成はストア派よりむしろプラトンの伝統に忠実である。欲望の部分について、それが「非ロゴス的」であることはむろづ

問題ではない。問題は氣概の部分である。氣概についてプラトンは『国家』第四巻で、欲望がロゴスに逆らつて強制するときロゴスの味方となつて戦うと言つてゐる (440B)。しかし、『法律』

では氣概の力が非ロゴス的な力 *akoyiotatō bīa* と呼ばれてゐる。氣概はロゴス的なのか、非ロゴス的なのか、このような疑問が「非ロゴス的」の意味に区別を要請し、氣概は、それ自体としてはロゴス的でないがロゴス的部分の命令に従うかぎりにおいてはロゴス的であるとの解釈が生まれたと考えられる。そこで「非ロゴス的」は、「ロゴスにしたがわない」という意味と「ロゴスに与らな」いう意味に区別されたと考へられる (cf. Galenus, *De placitis Hippocratis et Platonis*, IV,2,12, Stobaeus, *Elogiae* II,

7, 1)° 栄養摂取の部分は「ロゴスに与らない」という意味で非ロゴス的であるが、気概はロゴスにしたがわないことがあるという意味で「非ロゴス的」であるとされる。ネメシオスもこのような解釈の伝統にしたがつて非ロゴス的部分を「一つに区分している。気概の説明に用いられた語彙は後述するプラトン『ティマイオス』を明らかに意識している。

気概あるいは怒りを血液の沸騰と結びつける説明がクリュシッポスの見解であつた可能性も排除できないが、そうであるとしても、ガレノスが指摘しているように、クリュシッポスの独自な見解ではなく、プラトンに遡る古くからの見解をクリュシッポスも採用したと考えるほうがよいであろう (*De placitis Hippocratis et Platonis*, III, 1,30 [V 292 K])。気概にともなう身体的变化についてのこのような説明は、たとえばアルキノオスのプラトン学説の要約にも見いだされる。しかし有名なのは時代を大きく遡つて、アリストテレス『デ・アニマ』第一巻の次の箇所であろう。

自然学者と論理学者 *διαλεκτικός* とは異なつた仕方で魂のパトスそれを定義するであろう。たとえば怒りとは何か、論理学者は苦痛に対抗する欲求といったように定義するが、自然学者は心臓のまわりの血液と熱が沸き立つことと定義するであろう。

アリストテレス『デ・アニマ』 I, 1, 403a29

そして氣概や怒りについてのこののような説明が究極的に指し示

しているのはプラトン『ティマイオス』の次の箇所であると思われる。

〔神々は〕魂のなかの、勇気や気概に与る種族は、勝利を好みるものであるから、頭に近い、横隔膜と頸部との中間に住まわせた。この種族はロゴスに聞き従うものであるから、欲望の種族が、アクロポリスから発せられた指示や命令（ロゴス）に自発的に従おうとするときには、ロゴスと力をあわせて抑えるためである。そして心臓だが、これは血管の結び目であり肢体のすべてに勢いよく循環している血液の源泉であるから、護衛の位置に住ませた。肢体になにか不正な仕打ちが外から加えられているとか、あるいはときどきして内なる欲望によりなされないとロゴスの報告があつて、気概の力が沸き立つとき、あらゆる小道を経由して、身体における感覚器官がこぞつて、激励と制止を感覺しつつ、従順なものとなり、全面的に服従する。このようにして最善の種族が肢体のすべてにおいて主導権を取ることを認めるのである。

怖ろしいことを予想したり気概の種族が目覚めたりする場合の心臓の鼓動だが、怒っている（気概を働かせている）人々のこののような膨張はすべて火によつて起こるということを予見していたので、心臓に従者を用意して肺の種族を植えつけた。この種族はまず第一に柔らかく血の氣のないもので、第二には海綿のように内部に貫通した孔をもつてゐるがそれは、氣息と水分を受け入れて冷却し、熱している

ふきに休息と落ち着きを与えるためである。だから血管の

通路を肺にまで切り開き、心臓のまわりを緩衝材のよくな肺で囲んで、気概が心臓において最高潮に達したふきも、心臓がふちあたるのはしなやかなもので、しかも心で冷却されるので、負担が少なく、気概とともにローラスによるよく仕えることができるためである。

【アリスト】

人間の身体の制作を語るプラトンは、気概の働きに適した身体の構造を述べている。身体の構造についての説明はもちろん何らかの自然学的知見に基づいたものであろうが、身体の構造と気概の働きとの関係はミュートスの領域に属する説明であらうし、身体的变化が先かそれとも怒りが先かといった問題は論じられていない。ストア派は、『ティマイオス』に示された関心を發展させつつ、パトスを始めとする魂の高度な働きを身体的変化と結びつけ、魂に生ずることと物体に生ずることとの説明の一元化を図つたと見なすことができるのではないか。されば、プロティノスは、この一元化を行き過ぎると考え是正したと見るに至るに至る。

【註】

(1) φυτικοῦ Sleeman, 「本の部分」、あるいは
μυθικοῦ!
(2) Enn. 2 θυμοῦ.
(3) πρὸς τὰς κράσεις ἀλλ' οὐ πρὸς τὸ δοκηθὲν λυμῆρασθαι, Bréhier,
Armstrong の読み方を用い。πρὸς τὰς βράσεις οὐδενὸς ἄλλου,
ἀλλὰ πρὸς τὸ δοκηθὲν λυμῆρασθαι, ed. mai. et min., βράσεις「沸騰」せ ed. mai. に採用された修正⁶ feruores animi ふるやれ
トシタ。

(4) αὐτῷ παρ' αὐτῆς] αὐτῷ scil. τῇ ὄρέξῃ ed. mai. et min.,
αὐτῇ τῇ παρ' αὐτῆς] αὐτῇ scil. οὐσίᾳ Bréhier
(5) Armin の校訛では、「おみがぼくの望んだるにむかうて
をやめにした」となるが、採らない。

(6) 「収縮」「弛緩」などが身体的な变化を表してみると解釈するに、むづくも困難となるのは「刺激」⁷ ὅρεις の解釈である。『咬む』を意味する動詞の名詞形であるこの語は「咬むいみ」の他、「鋭い刺激」を表すために用いられることがあるが、身体的变化を表す用例はなさないである。

LSJ さゝの箇所の用例を引いて ‘of mental anguish’ を説明している。しかし、パトスと判断との区別する文脈で、「判断そのものではなく、判断に付随する」といわれており、「付隨する」という表現の用いられてゐるところの解釈に対して疑問を抱かせる。またほぼ同じ内容を述べた第五巻では δῆγεις が念あれていたるところだが、この第五巻では δῆγεις が念あれていたるところが V,1 [V 404 K] (SVFI I, 209)。Lacy の校訂では IV,3 συστολὰς καὶ ταπεινόσεις καὶ δῆγεις ἐπάρσεις τε καὶ διαχύσεις λυθεῖ V,1 にも συστολὰς καὶ χύσεις ἐπάρσεις τε καὶ ταπεινόσεις λυθεῖ。χύσεις のかわゆる λύσεις’ ταπεινόσεις のかわゆる πτώσεις と読む提案もある。

(7) 欲望について述べた第一七章で、現在の善をめぐつて快、予想された善をめぐつて欲望、現在の悪をめぐつて苦、予想された悪をめぐつて恐怖が成立すれどもふわれているかの意味では Matthaei の章順がおわりにふわるといえぬ。

(8) ἄμητa 「禁の事」 Galenus さāμa 「血縄ふくわゆる」 と読んだいた可能性が高い。